

市民に海を開放した 横浜復興

機能中心の港に市民の憩いの場をつくらうという
発想は、横浜の山下公園を起点としている。
大正時代に斬新な都市計画が実現した背後のエピソード。

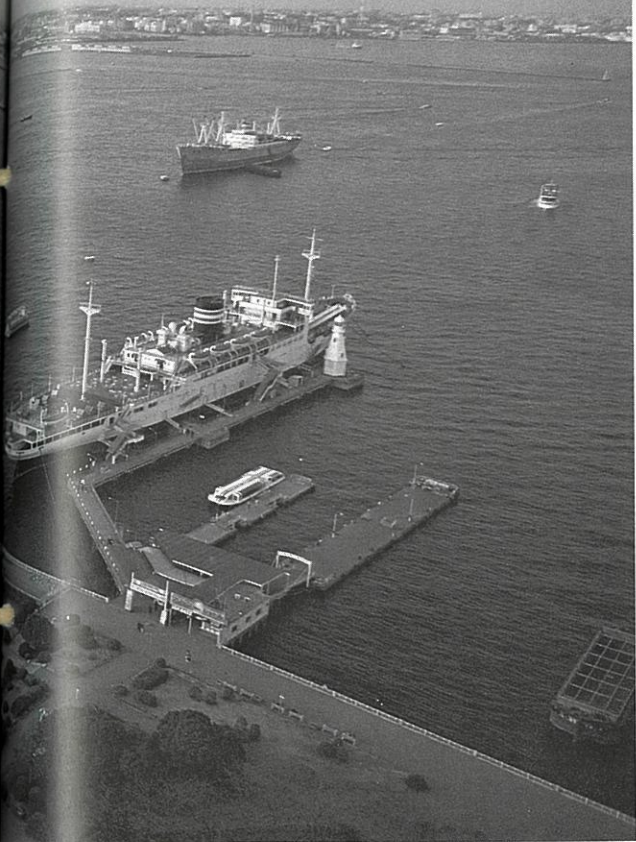
田村明

写真はミナト・ヨコハマのシンボル山下公園。臨港鉄道と海岸通りが公園に沿って伸びている

震災復興で造られた山下公園

私が横浜に住んだのは、山下公園の前にある住宅公園の賃貸アパートであった。十一階建の中の九階で、昭和三十八年当時としては抜群に高い高層アパートである。窓からは山下公園の緑と港がよく見えた。そこには今よりはるかに頻繁に、美しい外国の客船が姿を見せていた。

当時の私の職場は銀座にあった。横浜から



実現するはずのない臨港公園

も立派に通用するどころか、今日でも出来ない計画の下に投資されたことが、時代が変り動いても、なお山下公園が人を呼び寄せ、人にミナトを味わわせてくれるのである。

山下公園は、出来たときから最近まで、日本の中では唯一の臨港公園であった。港といえ、とにかく荷役をする機能的な場所、船の接岸できるバースの数か、その補助機能を果たす物揚場、上屋、倉庫などをとってきた。荷役でこたえたがえしている埠頭もそれな

にくらべると距離もはるかに近く、家賃も%でいって、銀座まで地下鉄一本で行けた埼玉県のアパートをこたえて、横浜を選択したのは、なんといっても山下公園の前にあつて

の横浜は、米軍による市街地の接収と解除後の空白で、荒れてうらさびれたイメージであつた。しかし、私はすっかり横浜が好きになつた。その後、横浜再建の計画を民間のコンサルタントとして立て、遂に横浜市役所の企

画調整局長として町づくりの仕事をする事になってしまった。考えてみると私の人生を横浜と密着して歩ませたものは、山下公園であり、ミナトであつた。

山下公園は、関東大震災の復興計画の中で瓦礫を埋めて新たに造られたものである。着工は一九二五（大正十四）年九月一日、一九二九（昭和四）年四月末日に竣工している。総工費は七十九万七千四百円余りであつた。港に細長く面しているその長さは、八百四十メートル弱、幅は九十メートルで、面積は七・四ヘクタールほどである。広く海に開けているから、沖から現われる船も真先に見えるし、また、外国へ向かう船を最後まで見送ることが出来る。沖の泊地に繋留している船は、公園から全部見わたせた。航空機がまだ輸送手段にならなかつた時代、ここは最も近い外国であり、景観もそれにふさわしくとのえられていたのである。公園の一部は埋め残されて小舟の溜りとなつて、港につながつていた。ここにはそれ以前に、フランス埠頭とよばれる小波止場があつた。幕末の頃、井上馨や伊藤博文は、ここから小舟で日本を離れ沖の本船に移り、渡航している。

ミナト・ヨコハマのシンボル

戦後の山下公園は米軍に接収され、フェン

実現が試みられたほどである。機能中心の考え方に対して、たつぷり港いっばいに広がつた、一般市民の憩いの場をつくるという計画は、かつての港津屋の側からいえば実現するはずがない。横浜の港の地区については、港湾関係者の力が圧倒的に強かつたはずである。

外人が権利を持っていた地元

私は、横浜市役所に入つても、なおかつこのことが疑問であつた。市役所に入れば、ますます港湾関係者が機能一歩ばりて、このよなゆとりや潤い、遊びといった考え方が乏しいことを痛切に感じたからである。誰か、すばらしい公園計画が都市計画の先覚者が横浜市にいて、それがこの計画を実現させた、と考えたいところである。だが、残念ながらそうではなかつた。

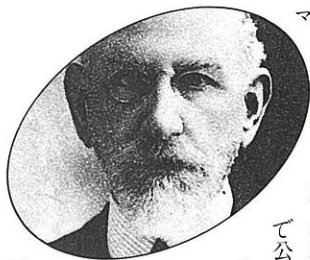
山下公園に面する山下町は、もともと外人居留地であつたところで、外国商館が軒を並べていた。いまの山下公園の前の海岸通りは外人たちの散歩道であつたし、その海面ではボートレースやヨットが行なわれる、海浜レジャーの場所でもあつた。大震災によって狭い道を広げるために区画整理が必要とされたが、何しろ居留地の土地は永代借地という不平等条約の時代の名残りが残り、容易ではな

い。そこで、イギリス人六人、アメリカ人五人、フランス人二人、中国人一人と日本人土地所有権者三人によって区画整理委員会が組織された。この委員長には、人望厚かつたイギリス人のマーシャル・マーチンが就任した。マーチンは自費で事務所を置き、難航する永代借地権の整理のため、外人ひとりひとり説得して了承をとりつけた。アメリカやイギリスなどまで渡航して説得に当たり、何とか区画整理を行なうことができた。

市が経営感覚でホテルづくり

山下公園は、このマーシャル・マーチンの示唆によつたものである。それまで海岸通り

マーシャル・マーチン



公園の緑越しにミナトが見えるという山下公園の特色はいっそう失われた。もつともこの頃は、山下公園前の海岸通りにびっしりタコ

ヤキやトウモロコシ売りの露店がすき間なくつながら、港を見るところではなかつた。それにかんじんの豪華客船も、航空機に代わられてすっかり影をひそめてしまつた。

港はたしかに変つた。それでも、いまもヨコハマといえはミナト。ミナトと云つて人が訪れるのはこの山下公園である。ミナト祭の日、花火大会の日、大晦日の汽笛が鳴る夜、そのほか何かにつけて、いまもヨコハマのシンボルであるミナトは、この山下公園に代表されている。今から六十年以上も前に現在で

を散歩し、海面を使用していた外国人の実績や既得権という面もあるが、マーチンの区画整理への努力が物を言つたといえる。その結果生まれた山下公園は、外国人のためだけでなく、広く一般に開放され、横浜のシンボルになった。外人に言われなければ、それまでに無かつた良質のものを生みだせないというのも残念な話だが、また、他人が言つたにせよいいものはいいとして受入れた、横浜のもつ柔軟性を評価してもよいだろう。

横浜の基礎となつたのは、このように外人からの要請や提言によるものが多いのだが、日本人も何もしなかつたわけではない。その一つに、山下公園を借景にして経営された、ニューグランドホテルがある。旧グランドホテルが震災で壊滅し、再建できなかったとき横浜に一流の良ホテルを考え、当時の有吉忠一市長が商工会議所の井坂会頭に相談して、開業した。しかもその土地、建物は、横浜市が震災復興の資金の中から百万円余りを投じて建設し、ホテルに賃貸して経営させることにしたもので、当時の市役所には珍しい地域経営的な感覚によつて海岸通りが復興していった。いま、その時植えた銀杏の木が亭々と緑の帯をつくっている。

有吉忠一



の思想も、戦後の横浜再建の中に生かされている。私が横浜

市に入つてから、市民と港、市民と海を近づけるための基本構想をたてた。この十五、六年の間に、金沢、本牧、大黒町、そしてみなとみらい、といわれる都心部の再開発の中にも、必ず港や海に面し、市民に開かれた公園がつくられつつある。それでもあの当時、都市の一番いいところをすぐれた公園をつくる先見性と実績を越えるのは容易なことではない。[たむらあきら 法政大学教授]